

第5章

Q & A

Q1、開設したいと思ったらどこに報告、相談したらいいですか？

A：モデル事業を行なったグループホームの担当者や行政が開設時の相談やアドバイスを行ないません。

運営規模、食事の提供など方法によっては、保健所、税務署と相談する必要もあります。

Q2、目的の理解が無い人への周知方法はどちらがいいですか？

A：認知症サポーター養成講座などで認知症カフェの説明を行なうと効果的です。自治体、行政と地域密着型介護事業所等と連携を図りながら、認知症地域支援推進員などが中心となり、認知症の啓発活動を行ないます。認知症に対しての偏見を除くような取り組みと共に開催目的を明確にしていくことが重要です。

Q3、食事の提供についてどちらがいいですか？

A：カフェで提供する飲料、茶菓子は、コーヒー、紅茶など飲み物が主であるが、茶菓子としてクッキーや和洋菓子、駄菓子、果物、デザート類また、地域性や参加者の年代に合わせて漬け物やお浸しなどが喜ばれています。また、ランチなど調理される物の提供については調理する人、食材などの衛生管理を徹底し、事前に保健所などと相談する事が必要です。

Q4、送迎についてどちらがいいですか？

A：カフェまでは自ら来るのが望ましいですが、交通の便や人手の有無によって、自動車での送迎も考えられます。その場合、事故のリスクを視野に入れ、事故対応マニュアル作成や周知、送迎車両の保険加入、送迎に携わる人に対して移乗動作技術の習得、ボランティア保険の検討などを行い、お互いの確認が重要です。

Q5、相談室の設置は必要か？

A：特別に相談室として設ける必要性は無いが、相談者が相談しやすい環境を整えることが望ましいです。

同じスペース内であっても、相談コーナーとして少し離れたところにテーブル、椅子を置きプライバシーや相談内容に配慮します。また、相談内容によっては別日に改めて行うなど配慮が必要です。

Q6、設営、ディスプレイについては？

A：参加人数、参加者の身体機能の程度により、テーブルと椅子、座卓に座布団、季節によっては炬燵などを使用し、季節の花を飾り、生演奏やCD、カラオケなどBGMとして音楽を流して居心地の良い雰囲気、環境をセッティングすることで参加者の満足度がアップするように環境を整えましょう。

Q7、参加人数

A：開催場所、広さ、参加対象（認知症当事者、認知症のご家族、ボランティアなど）、内容やテーマによって調整が必要となります。また、カフェの規模を計画立てて運営側、参加者側と共有し、参加者間でグループ化され、話が偏らないように配慮します。

第6章

事業報告会アンケート

結果と考察

1. 参加者数 計 158 名 アンケート回収 109 名

*割合は回収数及びチェック数によりますのでご了承ください。

行政・地域包括関係者 66%

事業者 29%

一般 5%

(考察) 認知症カフェを地域で行うことについて、行政や地域包括関係者の関心が高いことが分かる。様々な職種やサービス事業者、地域と一緒に進めていくためには、さらに啓発が必要である。

2. 報告は何で知ったか

案内文書 95%、知り合いから 2%、その他 3%

(考察) 行政やGH協議会などの周知によって、参加した人がほとんどである。他団体へも会員への周知をお願いしたところであるが、他団体の研修と日程が重なるなどの理由で参加が少なかった。今後「認知症カフェ」を進めていくに当たり、多団体への周知を工夫することが大切である。

3. 参加のきっかけはどうか(複数選択)

テーマに関心があった 56%

介護の仕事に関わっている 26%

その他 18%

(考察) 今回の報告会に参加した人は、何らかの関心がある人がほとんどであることが分かった。安心して住み続けられる地域を造っていくために、「認知症カフェ」などの居場所づくりに関心の高いことが伺える。

4. 認知症カフェとの関わりについて

認知症カフェを実施している 20%

認知症カフェに協力している 21%

認知症カフェを今後開設したい 37%

認知症カフェに今後関わりたい 17%

認知症カフェに関わる予定は特にない 5%

(考察) 今回の「認知症カフェモデル事業」を行った事業所関係者や協力しゃである行政・地域包括関係者、事業者などの参加が多かった。同時に今後開設したい人も約 40%あり、モデル事業の取り組みがきっかけとなり、各地へ広がっていくことが期待できる。

また、「人が集まらない」「大勢いたらいいわけではない」「同じ場所だと参加する人がいつも同じである」「自分でカフェに来ることが難しい人が参加を望む場合は」という意見があったが、地域性があり、集まりやすいところ、過疎地で住民が少ないところなど色々な特性がある。何人集まるかではなく、身近に気軽に行ける場所があるということが大切であり、地域のニーズに合わせて、徐々に少しずつ、かつできるところからまず初めてみるのが第 1 歩となっていく。

自力で行ける場所に、どれだけ様々な特性をもった「認知症カフェ」ができることを期待したいところである。行きたい人が自分の居場所を選択していけるのが望ましい。

5. 認知症劇について

期待通り 67%、まあまあ 30% 期待外れ 3%

(考察)「笑いの中に認知症の症状が入っていて一般の人が分かりやすい」

「認知症の初期を取り扱っていた部分と相談先につなげる部分の連動がとてもわかりやすかった」など好評だった。劇は、一般の人も関心が高いため参加しやすくわかりやすいのが特色である。認知症の理解を深めるためには、まず参加してもらうことが必須であり、きっかけづくりのツールとして今後も期待できる。

6. 講演について

期待通り 62% まあまあ 38% 期待外れ 0%

(考察)「とてもわかりやすく、今後に生かしたい」という声が多かった。また、カフェのあり方や目的の軸が整理できた」という意見もあり、様々な形態があることを理解できていた。また、目的の再確認など、「認知症カフェ」を設置するにあたっての方向性の確認にもつながっている。

7. 実践報告について

期待通り 60% まあまあ 40% 期待外れ 0%

(考察)「各事業所の色が違い、それぞれに工夫していることが分かり参考になった」「事業所だけに任せるのではなく、地域の一人ひとり自分ができることに取り組んでほしい課題点が参考になった」「実施主体での目的の共有と地域の協力が大切だと痛感した」などの意見があった。今回のモデル事業は宮城県内の5圏域で実施したが、県内は広く各地域の特性を持ち合わせている。地域が違えばニーズも違ってくることから、各報告からその違いを感じとっていただけただけのは一定の評価と言える。自分の地域で開設するとき、どんな運営方針で実施し、またどんな協力ができるのか、取り組むうえでの参考になれば幸いである。

特に実施しての課題は、運営者だけの問題ではなく、地域に関わる皆が地域の一員であるという意識をもって積極的に参加しいいものにしていくことが求められる。

8. 今回の「認知症カフェモデル事業報告会」感想

「どのような取り組みや働きかけをしていけばよいのかについて学ぶ機会がほしい」「定期的に各地の認知症カフェについて知りたい」「本格的にカフェが稼働した後も報告会を行ってほしい」などの意見がありました。今回の報告のように、どの事業所にも共通する課題や地域による個別の課題がある。運営を行いながら悩みや課題ができてくることは予測できるので、ぜひ「認知症カフェ連絡会」などの検討をしていきたい。

その他「助成金を出してほしい」などの声もあったが、助成金や補助金については自治体によって考え方が様々で、それをあてにしているとなかなか始められないのが現状であり、できることから始めることが大切である。また、助成金は一時的なものもあり、地域の自治会やボランティアの協力を得るなど、助成金や補助金がなくてもできる運営を構築していくことが望ましい。

第7章

オランダ・イギリス・

日本の認知症カフェの現状

オランダ、イギリス、日本の認知症カフェの現状

認知症介護研究・研修仙台センター

主任研修研究員 矢吹知之

1. オランダの認知症カフェ

1) 経緯

1997年に始まったアルツハイマーカフェは、高齢者の精神疾患研究センターの老年心理学の専門家ベレ・ミーセン博士とアルツハイマー協会が協力しライデン大学で開催したのが始まりである。現在アルツハイマーカフェは240以上、カフェインなしのアルツハイマーティーハウスが用意されている。普及にあたっては当初メディアが大きな役割を担った。

2) 現状

| | |
|-------|--|
| 名称 | アルツハイマーカフェ（ユーロ圏の登録商標） 実施には、アルツハイマー協会地方支部の関与が必要であり、その証としてアルツハイマーカフェの赤い文字のフラッグや看板が掲げられている。 |
| 目的 | ①認知症についての医学的情報や社会心理学的情報の提供 ②抱えている問題についてオープンに話すことの重要性を伝えること ③認知症の人や家族が抱えている問題について地域社会が再認識し受容すること ④認知症の人とその家族に対する社会的孤立の回避 ※ゆるやかな継続的教育と地域への啓発ピアサポートの場ともいえる。専門的な家族支援については、ミーティングセンターが担う。 |
| 対象 | 認知症の本人、家族介護者、家族の仲間（地域住民）、専門職者 ※参加者数の平均は約50名程度（認知症の本人2～3名） |
| 頻度・時間 | 月に一回、夜19:00頃から2時間が多く、昼間開催のところも多少ある。 月曜日から木曜日までに開催し、金、土、日、祝日は開催しない |
| 運営者 | Alzheimer Netherlandsの職員が加わり、地域のいくつかの福祉団体やNPOが加わることで中立性を確保する。アルツハイマー協会の地方支部の関与がないカフェは、地域の介護、福祉、医療関係法人が職員を派遣し連携して開催する。 |
| 会場 | 中立性が高い場所、公共交通機関が利用可能で地域の人々のなじみの場所をAlzheimer Netherlandsが計画的に設置する。優先順位として一般のカフェやレストランが最も高く、施設などでの開催は好ましくないとされている。 |
| 進行 | カフェコーディネーター、ディスカッションリーダー等の名称の人が全体の司会進行やディスカッションでのQ&Aの進行を務める。これらの人はアルツハイマー協会が準備する研修を受講。 |
| 内容 | カフェタイム（情報収集と受け入れ）30分→情報提供（教育・ミニ講話）30分→カフェタイム（休憩とコミュニケーション）30分→ディスカッション（Q&A）30分。この進行はどこも変わらない。毎回、認知症に関する情報提供の内容が異なる。 |
| 音楽 | ほとんどのカフェでカフェタイムにBGMとして音楽を生演奏する。ただし、皆で歌うことなどはなく、あくまで話を促進する雰囲気を作るツールとして用いられている。楽器は、ピアノ、アコーディオンが多く主役にはならない。 |

| | |
|----------|--|
| 参加費用 | 無料 |
| スタッフ教育 | カフェコーディネーター研修を Alzheimer Netherlands が実施、ボランティア研修も準備されているが必須ではない。 |
| 運営の手引書等 | ベレ・ミーセン監修のカフェマニュアル及び、Alzheimer Netherlands の設置基準に基づく。 |
| 飲み物・お菓子等 | コーヒー、紅茶のみがほとんど。オランダはコーヒー文化がありコーヒーを好む。お菓子は、クッキーやチョコレートが少々。食事としてサンドイッチやパンを用意することがある。ワインやビールも用意しているがこれは有料。 |
| 財源 | 国から交付される自治体予算から自治体が負担。または、アルツハイマー協会本部や地域支部が NPO などから助成を受け財源に充てている。多くのカフェで一回につき日本円で約 1 万円程度の補助。会場内に募金箱も置いてある。 |

●オランダの認知症カフェの工夫とコンセプト

- ①敷居を下げる時間（開催時間）
- ②無理のない開催頻度と継続性（開催時期と頻度）
- ③会話の敷居を下げる（ネームプレート、音楽、時間管理、司会進行）
- ④参加までの敷居を下げる（会場選定と予約）
- ⑤地域の財産とすることでカフェの存在の敷居を下げる（運営方法）
- ⑥安定したプログラムと仕掛け
- ⑦出会いの場を提供し、出会いを演出する（参加者の枠を取り払う）

3) 課題

情報提供が中心であることに不満を漏らすスタッフもいた。

4. イギリスの認知症カフェ

1) 経緯

オランダから 3 年遅れ 2000 年からハンプシャー州ファーンボローで開催された。その後 2009 年の国家戦略によって明記されたことによって、現在国約 600 か所で展開されている。イギリスの認知症カフェは、認知症の人と家族、そのケアにかかわる専門職者のみで構成されている。当初はオランダに習い、認知症の人と家族、そのほかに認知症に関心のある人も入っていたが、回数を重ね徐々に同じ経験をする他の仲間から受ける精神的サポートの効果を重視する手法に変化していった。

2) オランダとイギリスの違い

対象者の違いから、カフェで展開される内容もことなり、オランダのように定型的なプログラムで実施されるのではなく、アクティビティが中心に行われている場合が多い。

イングランドでは、正式なルールや、運営手法というものはない。唯一のルールは、最低 16 名の参加者ということだけである（Alzheimer Society 資料より）。人数以外は、カフェの運営者にその方法が任されているためにカフェによって行われるアクティビティは異なる。イギリスでは、本人の声から政策やサービスが開発することに努める。その結果、認知症の人と家族をパーティションや別部屋にて実施され、家族は介護の悩みについて話し合い、認知症の人は自分の悩みやレクリエーショ

ンを行う形式をとるところが多い。

また、カフェのレイアウトは、当初はイギリスでもオランダのようにカフェスタイルで行っていたが現在は、一つの大きなテーブルで実施しているところが多い。

3) 現状

| | |
|--------------|--|
| <p>名称</p> | <p>【イングランド】 メモリーカフェ、ディメンシア・カフェ、アルツハイマーカフェ、メモリークラブ、ケアカフェ等 (正式名称は、メモリーカフェである。もっとも多い名称はメモリーカフェでイギリスアルツハイマー協会が主催するカフェの8割はこの名称を使用している。また、「アルツハイマーカフェU.K」という、組織もありこれは、オランダベレ・ミーセンの考えたカフェモデルを継承した独自の組織である。)</p> <p>【スコットランド】 メモリークラブ、ディメンシア・カフェ、D-カフェ、フォゲットミーノットカフェ、オアシスカフェ、パームカフェ、クロケットクラブ、フットボールカフェ、ガーデニングクラブ、ミュージカルクラブなど様々 (正式名称は、ディメンシア・カフェであるがほとんどこの名称は使われず、通称でそれぞれのカフェをいわれている) ※本書では、スコットランドを除くイギリスアルツハイマー協会 (Alzheimer Society) 並びにスコットランドアルツハイマー協会 (Alzheimer Scotland) が実施するカフェを紹介する。</p> |
| <p>目的</p> | <p>①認知症の人や家族介護者が孤立せず社会との繋がる ②認知症の人や家族介護者相互支援 (ピアサポート) が行われること ③認知症や介護に関する情報提供がなされること ④専門家とつながり早期支援に結び付くこと ⑤通常のカフェに出かけるようにリラックスすること</p> |
| <p>対象</p> | <p>認知症の本人、家族介護者が中心</p> |
| <p>頻度・時間</p> | <p>開催頻度は、そのカフェによって異なるが、月に一回、隔週、毎週などさまざまである。時間は、午前中のみ、午後のみ、お昼を挟んで午後まで行うところの三種類が混在し実施する団体によって異なる。 月曜日から金曜日まで開催されており、土日祝日は開催しない。</p> |
| <p>運営者</p> | <p>アルツハイマー協会支部が開催するカフェや地域の NPO が開催するカフェなど様々。スコットランドは殆どがアルツハイマー協会支部が実施している。</p> |
| <p>会場</p> | <p>地域の協会のコミュニティホール、Alzheimer Society の事務所、レストラン、高齢者住宅の集会所、レストラン (少数)</p> |
| <p>進行</p> | <p>プロジェクトワーカーは、アルツハイマー協会の職員の役職名でアルツハイマー協会が主催するカフェでは、企画運営を担っている。また、カフェコーディネーター (ファシリテーター) は、ボランティアの場合もあるがボランティアのコー</p> |

| | |
|----------|--|
| | ディネート、カフェの環境設定、記録などを担う。しかし、カフェの運営団体によって呼び名は異なる。 |
| 内容 | カフェごとによって異なる特徴あるアクティビティを行っている。ゲームや歌、ビンゴ、軽スポーツなど様々なことを行う。また、特にアクティビティを行わずに話だけをするとところもある。スコットランドの場合は、アクティビティや興味に応じたテーマ設定が行われ、サッカーやガーデニング等特徴がある。 |
| 音楽 | CDなどで音楽を流す設備はあるが、使用しないカフェも多い。 |
| 参加費用 | 無料が基本であるが、食事を提供するところでは3ポンド程度（日本円で400円程度負担がある） |
| 飲み物・お菓子等 | コーヒー、紅茶が提供される。インスタントがほとんど。食事を提供するカフェは、キッチンで調理する。 |
| スタッフ教育 | スコットランドでは、カフェスタッフのフレームワークが準備されており集合研修を行うが、必須ではない。 イングランドでは、Alzheimer Society 主催で1年に1回カフェマネジャーの全体研修と情報交換が準備されている。 |
| 運営の手引書等 | アルツハイマーカフェのツールキットが準備されている。オランダタイプで実施している団体は、ベレ・ミーセン監修の資料を基に実施する。 |
| 財源 | スコットランドでは、スコットランドアルツハイマー協会（組織名：Alzheimer Scotland）、イギリス（イングランド、ウェールズ、北アイルランド）は、イギリスアルツハイマー協会（組織名：Alzheimer Society）がそれぞれ寄付を募り運営資金を確保する。また、チャリティイベントなども頻繁に実施する。 |

●イングランドの特徴

- ①認知症の人と家族のみで構成される
- ②プログラム中心
- ③週に何回も開催される（多い方が良いという意識がある）
- ④孤立予防のために開催される

●スコットランドの特徴

- ①認知症の人と家族のみで構成される
- ②地域住民はキッチンボランティアとして参加
- ③趣味に特化したカフェが多数みられる

4) 課題

- ①デイサービスのように利用されている（家族不在が多い）
- ②地域住民への認知度は低い
- ③運営資金での困難さ
- ④カフェを名乗ることは自由なので内容が統一されていない

5. わが国の認知症カフェへの学び

1) カフェのタイプと目的

目的を明確にしなければ継続しない。施設入所者のためのサービスではなく、サービスに自然につなぎ、地域の偏見をなくすこと、地域づくりに貢献することが求められる。

2) 準公共財としてのカフェ

地域包括支援センター、認知症地域支援推進員の関与の必要性

3) 敷居を下げる工夫（基準）

これまで、サービスにつながらなかった人に対する新たな文化としての可能性、デイサービス、サロン、家族会との相違を明確化する。

4) カフェの効果

①若年性認知症の支援

専門職との出会い、友人作り、情報入手の場として有効

②認知症の早期支援体制の不足（認知症ケアパスへの位置づけ）

これまでサービスにつながらなかった人の早期支援、地域の理解により敷居の低いカフェでの地域包括等職員との出会い

③家族支援と認知症カフェ

介護離職による孤立、介護を理由にした自殺などの防止に役立つ

④高齢者虐待の未然防止と認知症カフェ

介護者の孤立防止、地域の理解者の増加により社会的孤立を防止し虐待の深刻化を防ぐ可能性。

<参考文献>

認知症カフェ ハンドブック

- 編著・監訳：武地 一 氏
- 協力：京都認知症カフェ連絡会、NPO 法人 オレンジコモンズ

発行：(株) クリエイツかもがわ

認知症カフェモデル事業委員会

委員長： グループホームなつぎ埜 蓬田 隆子
(宮城県NPO法人グループホーム協議会会長)

委員： グループホームぼらん気仙沼 帋岩 敬子 (気仙沼モデル事業所)
グループホームふかふか・はうす 中津留 美津江 (北部モデル事業所)
グループホーム歩風楽 及川 みき子 (北部モデル事業所)
グループホームあさみず 佐々木 真弓 (東部モデル事業所)
グループホームゆうゆう・多賀城 松本 裕子 (仙台モデル事業所)
グループホームもみの木 我妻 佳代 (南部モデル事業所)

協力事業所：グループホームみんなの家 及川 美恵子 (東部)
グループホームなつぎ埜 蓬田 隆子 (仙台市)

アドバイザー 矢吹 知之氏 (認知症介護研究・研修仙台センター主任研修研究員)
オブザーバー 前田 知恵子 (宮城県保健福祉部長寿社会政策課地域包括ケア推進班)

平成28年 3月 吉日 発行